

六<sup>む</sup>連<sup>れん</sup>銭<sup>せん</sup>

# 松代藩主夫人の旅



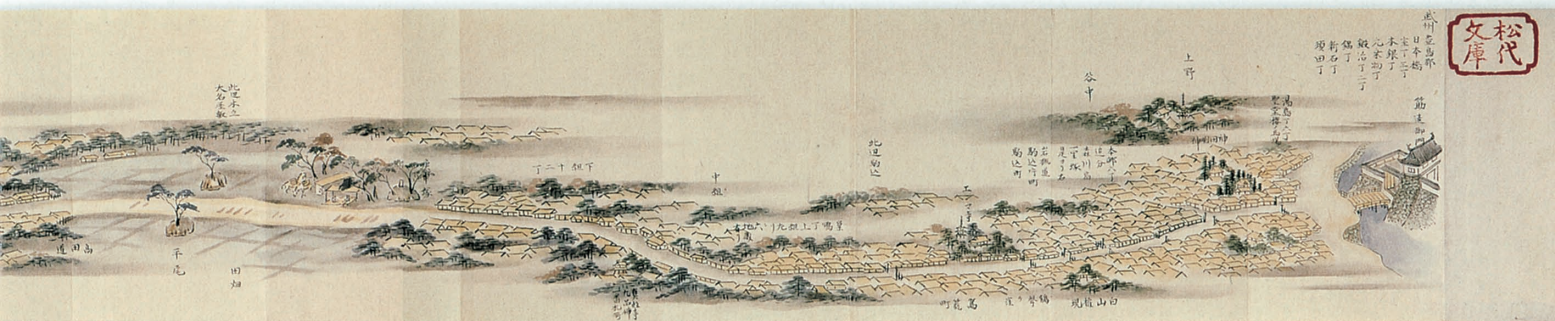
手焙 (真田宝物館所蔵)

暖房器具の一種で手を温めるためのもの。箱書には「御駕籠入御手焙」とあり、駕籠の中で使用したものとわかる。真田家の家紋のひとつである洲浜紋が型抜きされている。

平成23年6月発行

〒381-1231 長野市松代町松代4-1  
(真田宝物館)





# 松代藩主夫人の旅

江戸時代、女性は自由に旅をすることは容易でないといわれてきました。しかし、伊勢詣や三十三所巡礼など、寺社への参詣やそれに事寄せた物見遊山に出かける女性は多くいたのです。また、学問修行や江戸遊学など目的をもった女性の旅も増えていきました。

諸藩は国元のほか江戸にも複数の屋敷を構えていましたが、藩主夫人はそのほとんどを江戸屋敷で過ごしていました。しかし、旅ができなかったというわけではなく、湯治のために国元へ帰ることを許された例もあったといいます。また、江戸近郊へは比較的容易に旅ができたようです。

参勤交代制度は「武家諸法度」に掲げられ、諸大名が一定の時期を限って江戸と領国とを行き来した制度のことをいいます。江戸に伺候することを「参勤」といい、領国に就くことを「交代」といいました。幕府の代表的な制度として知られる参勤交代ですが、その時々には制度の見直しが行われたという事は、あまり知られていないかもしれません。

江戸時代末期の文久二年（一八六二）

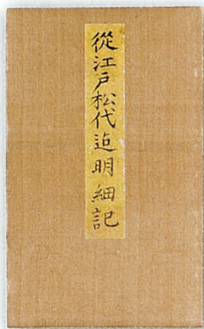
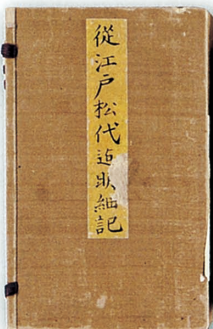
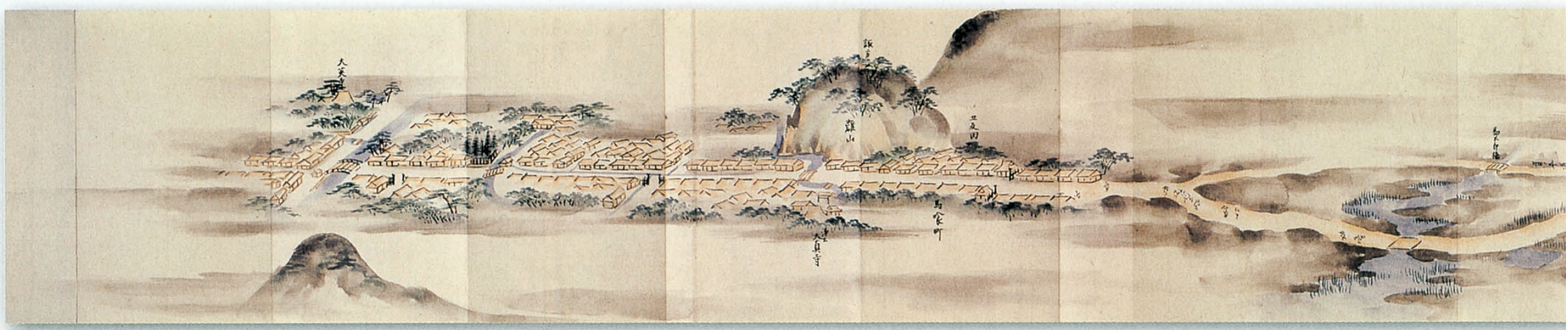
江戸に戻っています。

慶応四年（一八六八）には、江戸にいた貞松院と晴姫が再び松代に帰ることになります。つまり、貞松院と晴姫は二度にわたり江戸と国元を行き来したということになります。幕末期の藩主夫人らのこうした動きは松代藩に限ったことではなく、全国諸藩でも同様で、遠くは九州まで長旅をして帰った藩主夫人もいました。その時の「旅日記」が全国で確認されています。

松代藩主夫人が松代から江戸に向かう際には、当時の日記から北国街道から中山道に入る経路を使っていることがわかります。これは藩主の参勤交代と同じです。月についてみると、三月や十二月に行われており、特に決められた月があったわけではなく、参勤交代制度の緩和や復旧に伴ったものと考えられます。

行程は参勤交代よりも一日に移動する距離や休みをとる道中の間隔が短く設定されていました。江戸から国元までの日数は、参勤交代の際には川の出水などで足止めがなければ五泊六日でしたが、晴姫の場合には





**従江戸松代迄明細記** (真田宝物館所蔵)

江戸から松代までの街道の様子が色鮮やかに描かれている。宿場や旧跡、各地の名物や逸話などの記述もみられる。折本の形をしており、持ち運ぶため小さいつくりになっている。

には、幕府の衰退と対外関係の緊張などに伴い幕政改革が行われます。これにより、参勤交代制度は緩和され、あわせて「此表に差置候妻子之儀ハ国邑江引取り候共勝手次第致さるべく候(略)」と定められました。「此表」とは江戸のことで、藩主の妻子は江戸と国元のどちらかに住んでも自由とされたのです。

松代藩では八代藩主・真田幸貫の子である幸良夫人の貞松院と九代藩主・真田幸教夫人である晴姫(真晴院)がこの時、国元入りしています。しかし、同年の十二月には参勤交代が旧制に復されたことにより、二人は



**幣袋** (真田宝物館所蔵)

旅の際に道中の安全を祈るため道祖神に捧げる御幣を入れた袋。

おおよそ八泊九日かかっています。夫人の旅は藩主の参勤交代に比べてゆつくりとした道中だったのです。

旅の途中では、夫人自らも碓氷峠の山中茶屋や視茶屋の小休では名物の餅を食べており、籠原では名物の茶漬を供の者へ下していることもあり、景色を眺めながら食事を楽しむ様子が目に浮かぶようです。

貞松院や晴姫の「旅日記」は現在確認することができませんが、旅のなかで様々な名所や旧跡を見物し、多くの人々との交流のなかから見聞を広げていったのではないのでしょうか。

(文責 米沢愛)



# 松代藩9代藩主・真田幸教夫人 晴姫(真晴院)の江戸・松代間 行程表

## 文久2年(1862) 晴姫 江戸～松代

※文字は文書の記述のまま

日付	宿場 その他立寄り場所	内容
10月26日	江戸 板橋御本陣 板橋御本陣 戸田川 戸田川向 浦和宿	御発駕 御昼御着 御立 御渡 御野立 御泊
10月27日 風	浦和宿 大宮 天神橋 桶川宿 鴻の巣	御立 御小休 御野立 御昼 御泊
10月28日	鴻巣 吹上 熊ヶ谷 籠原 深谷	御立 御小休 御昼 御小休 御泊
10月29日 天気	深谷 堀田原 本庄 新町川 倉ヶ野	御立 御野立 御昼 御渡 御泊
11月1日	倉ヶ野 豊岡 板はな 安中八本木 松井田	御立 御野立 御昼 御野立 御泊
11月2日	松井田 横川 うすひ御関所 坂本 羽根石辺 のそき御茶屋 軽井沢	御立 御野立 御越 御昼 御ひ□いあそばし 御小休 御泊
11月3日	軽井沢 沓掛 追分 平原長龍寺 小室 海野	御立 御小休 御昼 御小休 御小休 御泊
12月4日 (11月)	海野 上田 鼠宿 下戸倉 矢代	御立 御小休 御昼 御小休 御泊
10月5日 (11月)	矢代 正玄寺 松代	御立 御小休 御着

## 元治元年(1864) 晴姫 松代～江戸

※文字は文書の記述のまま

日付	宿場 その他立寄り場所	内容
12月21日	松代 矢代 下戸村宿 坂木 鼠宿	御発駕 御昼 御小休 御小休 御泊
12月22日	鼠宿 上田 海野宿 牧屋新田 小むろ宿	御立 御小休 御昼 御野立 御泊
12月23日 昼後より雪	小むろ 長龍寺 追分 沓掛 軽井沢	御立 御小休 御昼 御小休 御泊
12月24日	軽井沢 山中 靉 うすい御関所 坂本 梨子木 松井田	御立 御小休 御小休 御通 御昼 御野立 御泊
12月25日	松井田宿 八本木 板鼻 万日同 高崎 倉賀野宿	御立 御野立 御昼 御野立 御小休 御泊
12月26日	倉賀野 新町川 新町宿 本庄 堀田村 深屋 籠原 熊ヶ谷	御立 御渡 御小休 御昼 御野立 御小休 御野立 御泊
12月27日	熊ヶ谷 吹上 鴻巣 桶川宿 上尾 天神橋 大宮宿	御立 御小休 御昼 御小休 御小休 御野立 御泊
12月28日	大宮宿 浦和 蕨宿 板橋手前 板橋	御立 御小休 御昼 御野立 御泊